

アーティストに憧れる青年は やがて、歯科医療に目覚める



理事長 **小原澤 友伸** こはらざわ・ともものぶ

のぶ:デンタルクリニック 東京都世田谷区中町 4-17-9 粕谷ビル1F

アートにのめり込み、ストリートアーティストの先駆者とされるキース・ヘリングに傾倒した。1989年の初頭に渋谷で同氏によく似た人物を見かける。翌日原宿での遭遇で、取り囲む取材陣の様子からキース本人であることを知る。つたない英語で話しかける小原澤青年にとつて、それは初めての英会話だった。何度も手紙を出していたこともあつて、やがて親交がはじまり、「ニューヨークに來ないか」とまで言われたという。大学は、手先の器用さを生かして歯学部と決めていた。キースが亡くなったのは入学数カ月前のことだ。

大学で教わる歯科医療は基本的にとはとても古く、数十年前から少しずつ変わってきてはいたものの革新的とはいえなかった。入学してからもアートの道を捨てきれず、勉学に身が入らない時期を過ごした。状況が一変したのは、94年に歯科医師になり東京医科歯科大学の大学病院に勤務してからだ。そこでコロンビア大学から戻ったばかりの井澤常泰先生と出会う。井澤先生の歯根端切除術は、実体顕微鏡を用いて根尖病巣の除去と歯根の尖端の切除と逆根管充填を同時に行うもので、腫れや痛みはほとんどない。この革新的治療との出会いで、小原澤青年はあらためて歯科医療に魅了されたという。

「あこがれのニューヨーク帰りというのもありましたが、先生は英語も流暢で立ち振る舞いなど、すべてがスマートに見えました。『医療はこうあるべき』という信念にも敬服しました。歯科医療に真剣に取り組みきっかけを与えてくれました」と、小原澤理事長は振り返る。

井澤先生の周囲には優秀な人物が集まり、常に議論が交わされていた。その他、東京医科歯科大学では、口腔外科、補綴科においても多くの最高の師匠にめぐまれた。これから世界に発表される新しい技術にも接することができた。若かりし頃に受けたこうした刺激は、現在でも、より良い診療を追求する信念と原動力になっているという。



アートにのめり込み、ストリートアーティストの先駆者とされるキース・ヘリングに傾倒した。



キース・ヘリングと小原澤青年